

CSO ラーニング制度 修了レポート

氏名 : 豊田 善史

派遣先CSO名 : オイスカ

大学名・学年 : 中央大学・2年



1. インターン前の自分との変化

このCSO ラーニング制度を利用する前は、環境問題については授業でわずかに触れるのみで、そこまで関心を持っていませんでした。この約8か月間を振り返ってみると、インターン先であるオイスカの環境問題への取り組みを間近で見たり、定例会などで環境問題へ強い関心や豊富な知識をもった学生と関わり合ったりしていくうちに、自分が持つ環境問題への関心が強くなったと感じたことが一番の変化でした。今ではテレビで環境問題がながれているとき、新聞で環境問題に関する記事を見つけた時、環境に配慮した商品を見た時などにとても興味を惹かれます。また、知識を得たことも実感する場面が多くありました。

例えば、以前気になって自分で排出量取引について調べたことがあったのですが、それを大学の授業で取り扱う場面があったりと、関心が増えたことで自ら積極的に環境問題について学ぶ姿勢が今の自分にはあるのだと感じています。コロナ禍で活動が限られている中で、自分たちができることを考え、行動できたことも一つの成長でした。大学1年生のころは、なかなか外には出られない状況で怠けている自分がいました。今では、貴重な時間を棒にふるってしまったと改めて思います。その点では、2年生からインターンに参加し様々なことを経験できたことは、本当に良かったと思っています。

オイスカの環境問題への取り組みの中で大きなプロジェクトが「子どもの森」計画でした。このプロジェクトは、子どもたちが苗木を植える活動で、ただ植えるだけではなく環境教育を行いながら苗木を植え、育てるというプロジェクトです。苗木を一本一本植えること、そして育てることは地道な作業で長い時間がかかります。他の団体でインターンをしているCSO ラーニング生の話を聞いても、やはりどこも地道な取り組みです。その地道な取り組みを一人一人が行うことが重要であり、持続的に取り組むこと、そして持続的に取り組む人材を育てることが環境問題へのアプローチであるということを学び、自分がその地道なことを行う一人にならなければならぬと強く実感しました。

また、インターン期間中に学生が主体となってインスタグラムでミャンマー募金の広報活動を行いました。初めは、学生全員がインスタグラムに不慣れなこともあって思うようには進まなかったのですが、運営していくうちに自分たちで評価できる点や反省点を見つけて話し合い、試行錯誤を繰り返しながら数多くの投稿を行いました。その結果として、数の方に支援をしていただくことが出来ました。さらに、インスタグラムでの広報活動は、後のインターン生にも引き継がれる活動になりました。普段は頻繁には利用しないインスタグラムで情報発信の方法を少し学べたのと同時に、支援をミャンマーに届けられたこと、オイスカでインターンをする学生が利用するアカウントを設立できたことは自分たちが挑戦した結果であって、何も始めなければこのような成果は生まれませんでした。この挑戦することの重要性を経験したことで、最近の日常生活において、挑戦する精神を持ち続けて行動しています。

2. 足りないものとこれから自分がやってみたいこと

約8か月間のインターン期間を通して一番自分に足りないと感じたものは、環境問題に関する知識と経験です。これは特に、定例会で他のCSOラーニング生とグループセッションしている時などに感じました。自分は、CSOラーニング制度を通して環境問題に興味を持ち始めたため知識と経験はゼロに近い状態で、他のCSOラーニング生が持つ情報や考えは自分にはないものばかりでとても刺激になり、環境分野に関する知識を深めたいと思うようになりました。また、CSOラーニング生の積極的な発言や活動、自ら学ぼうとする姿勢も自分には足りないものでした。

インターン期間の前半は指示されたことだけをやっていて、自ら取り組んでみたいことなどを提案するといった積極的な活動ができていませんでした。これは今となってはとても後悔しています。9月あたりに自分たちでインスタグラムを運営するようになった辺りから少しずつ提案などをするようになり、自主性ある活動ができたことで、とても充実感を感じていたのを覚えています。インターン期間は限られているので、より多くの活動をすればより多くのことを学べる、自ら積極的に学ぼうとする姿勢が大事であるということを今回経験だったので、3年生になってインターンに参加する際には積極性をもって多くのことを学びたいと思っています。

その他の反省点としては、せっかくCSOラーニング生と知り合うことができたのに、横の繋がりを築くことができなかつたことです。コロナ禍という状況の中で、なにをすればよかったですかは正直今でも分からないです。環境についての話だけではなく、違う一面をお互いに知ることができたらCSOラーニング生としての活動も、より充実したのではないかと思います。でも、CSOの活動が終わったからお互いの関係も終わりというわけではなく、これからも続くような関係をインターン後でも築いていければと考えています。この約8か月間は、環境問題に関する知識や経験を得ることができたのと同時に、自分に足りないものを探す、自分を見つめなおす貴重な時間にもなりました。

オイスカでのインターン期間内でできなかつたこと、例えば海岸林再生ボランティアにインターンが終わった後でも積極的に参加しようと思っています。また、大学のサークルのボランティア活動がコロナの状況も鑑みてこれから増えてくると思うので、そのような活動にも進んで参加していきます。大学が終わってからのキャリアをはつきりとはイメージできないですが、今回のようなインターンや環境問題に関するボランティア活動、またその他の分野の活動、様々な活動を通して大学生の間にできるだけ多くの知識と経験を積んで卒業したいと思います。

C S O ラーニング制度 修了レポート

氏名 : 小宮 岳
派遣先C S O名 : オイスカ
大学名・学年 : 東京農工大学・3年



1. 真剣さの中の楽しさ

私がインターンで経験したことの中で最も印象に残っていることは、10月の後半に参加させていただいた海岸林再生プロジェクトのボランティアだ。これは2013年の東日本大震災で失われた宮城県名取市の海岸林を復活させるというプロジェクトである。ただ参加する前は、少し不安もあった。というのも参加前にプロジェクト責任者の吉田さんから説明を受けたのだが、はじめに「お客様扱いはしない、生半可な気持ちでは来ないでほしい」というようなことを言われたのだ。もちろん適当な気持ちで参加しようとしていたわけではないが、もともと気の小さい私は「自分なんかが行って本当に大丈夫だろうか」と不安を感じた。

しかし、それは杞憂であった。実際にやってみると、みんな一生懸命に働きながらも自然と笑顔がこぼれる、そんな現場だったからだ。私が参加したときは、団体のボランティア、地元のボランティア、オイスカ職員、高校生などたくさんの人人が参加していた。当日やった活動は「溝切り」という作業だ。これはその名の通り溝を作る作業である。海岸林は盛り土をして上にマツを植えて作られているのだが、排水がうまくいかないところがある。海岸林に植えてあるマツは乾燥には強いが、過度な湿潤には弱いため「溝切り」をして水を出してやる必要があるのだ。この「溝切り」が、意外にもと言ったら失礼かもしれないが、とても面白かった。大勢で力を合わせひたすら溝を掘っていく。出来上がってみるとたまっていた水が流れ始めるのだが、それを見ると達成感がこみあげてくる。さらにその達成感をみんなで分かち合えるのだ。海岸林再生プロジェクトで、木を植えなくてもこんなに楽しいのかと驚いた。

この楽しさはお客様扱いをされていたら味わえなかっただろう。お客様扱いをされいたらきっと参加者の間に壁ができてしまう。たまたま同じ店に入ったような関係になってしまふからだ。さらに真剣に作業したことでも楽しさの大きな要因だ。みんなで一つの溝を掘るというのは、高校の文化祭や部活など似たような達成感がある。思えば大学に入学してから、大勢で真剣に一つのことに打ち込むという機会はほとんどなかった。社会に出ればますます減るだろう。そのような環境こそが、海岸林再生プロジェクト最大の魅力なのかもしれない。そう考えたとき、吉田さんの「お客様扱いはしない、生半可な気持ちでは来ないでほしい」という言葉の真意を理解できた気がした。真剣に打ち込むということは楽しい、というつい忘がちになってしまったことをこのインターンで改めて学ぶことができた。

2. 自分の課題と、修了後取組むこと

私はこのインターンで多くの刺激を受けた。その中でも、定例会などで他のインターン生と話をしていると多くの刺激をもらえた。なぜなら環境への意識が高い人ばかりだからだ。例えば、エシカル消費という言葉は聞いたことがあったが、実践している人の話を初めて聞いてとても驚いた。そして私の環境への意識はまだまだ低いということを痛感した。一方で、

私と同年代の人がこれだけ高い意識を持って取り組んでいるのだから、私にも同じような取り組みができるはずだという自信のようなものも生まれた。そこでCSO ラーニング制度修了後に取り組みたいことについて書いていく。

まずは環境家計簿をつけていきたい。これは定例会の最後の発表のときに私の班で出た案なのだが、電気やガスなどの使用量を入力するとCO₂排出量が算出されるというものだ。実際に12月と1月の電気使用量を入力してみたのだが、かなり使用量が違う(100kWhほど1月が多い)ことが判明した。同じ冬でも12月と1月でこんなに違うものかと驚いたとともに、1月の使用量の多さを反省した。思い返してみると、たしかに1月は暖房をつける機会が多かったように感じる。ただこのように数値化して記録することは非常に有効だとも感じた。そうすれば改善点がはっきりとし、行動に移すことができるからである。実際に暖房をつけずに毛布にくるまるなどの対策を講じている。今後は、ガスや水、ガソリン使用料なども記録して改善策を実行していきたい。

次に取り組みたいことはエシカル消費の実施である。エシカル消費にチャレンジするにあたって調べてみて分かったことが、不要なものを買わないことが一番重要だということである。環境に良い商品だから、フェアトレードをしているから、地域で作られたものだからといって不要なものをたくさん買ってしまっては本末転倒だ。まずは自分に本当に必要かどうかを見極めて、必要ならば環境に良いものやフェアトレードをしているもの、地域で作られたものなどを購入したい。こういったエシカルなものというのは総じて値段が高いが、不要なものへの出費を抑えれば購入する余裕も生まれるだろう。

しかし不要なものを買わないということにも、ある程度の努力が必要になる。その例がマイボトルを持つことである。マイボトルを持っていない場合、自動販売機などで飲み物を買うことは「必要」となる。逆にマイボトルを持っていれば、それは「不要」である。単純なことだが、こういった小さな努力を続け習慣にすることで、大きな結果につながると私は考える。

今回のインターンでは非常に多くのことを学ぶことができた。なかでも私の環境への意識というものがまだまだ低いと感じたことは、私にとって大きな収穫である。他にもっとやっている人がいると分かるだけで、自分もやろうという気持ちが芽生えるからである。1人の力では大きなことはできないかもしれないが、自分がやっていく中で周りに少しでも影響を与えられるよう、楽しみながら頑張っていきたい。

C S O ラーニング制度 修了レポート

氏名 : 畠 誠斗

派遣先C S O名 : オイスカ名取事務所

大学名・学年 : 東北大学・4年



1. 意識設定と準備

私はオイスカ名取事務所でのインターンを通じて、多くの事を学んだ。それは単純な農業技術だけでなく、今後、社会人として生きていく上で大きな武器となると感じている。私の主な活動は、宮城県名取市の海岸沿いに広がる海岸林の現場にて、つる性植物の駆除や溝切り、そしてゴミ拾いであった。私は今まで生きてきた中で、シャベルや鎌を用いた農作業、土木作業は全くする機会がなかった。そのため、オイスカ名取事務所での活動に参加する事で、プロや熟練の経験者さんから農、土木作業の技術を教わる事ができた。

次に、インターンを通じて学んだ事として、“常に意識を広く持つ姿勢”が挙げられる。オイスカが管理する海岸林の現場は、約100haの広大な範囲に及んでいる。この広大な敷地をオイスカ職員と名取市海岸林再生の会のメンバー、そしてボランティアのみで管理している。容易に想像できるかと思うが、全ての区域、敷地をそれぞれ確認しに行ってならば、その確認作業のみで日が暮れてしまう。では、如何にしてクロマツの病気やつる性植物を発見し、対処するのであろうか。その答えは巡視を怠らない事であった。巡視とは漢字の通り、クロマツや周辺環境を見て回るということであるが、それをいつ行うかが鍵である。巡視をする日を定期的に設けるのではなく、日々の活動、目的の作業区間に向かう際に周囲を見渡しながら行動する事で群生しているくずや藤づるなどのつる性植物、そして周辺一帯を枯らしてしまうマツ材線虫病を発見する事ができる。オイスカの職員の方々はこの姿勢が常に保たれており、クロマツや周辺環境の些細な変化に敏感である。ある女性職員の方はつる性植物だけでなく、珍しい虫や鳥の死骸、キツネの巣などを一瞬見ただけで気づきボランティアさんと共有していた。この些細な変化に気づける様、“常に意識を広く持つ姿勢”というの、間違いない1人の社会人として必要不可欠であるだろう。まず人間関係を形成する上で、相手の心情の些細な変化に気づく事によって、その人と共感できたり、信頼を得たりする。また、社会に求められる事というのは、刻一刻と変わり続けていく。製造業からサービス業まで、どの様な業種であろうと、その時代にニーズを捉える事ができなければ生きていく事ができない。この様に、社会で生き抜くために必要な“常に意識を広く持つ姿勢”的大切さをインターンを通じて学ぶ事ができたと思う。

そしてもう1つは、“活動の意義を明確にし、目標達成に必要な物を準備する”と言う事が挙げられる。オイスカ海岸林再生プロジェクトは現在、10カ年計画の第二次に突入している。これまで活動を継続するにあたり、幾つもの障壁があったと思うが、その内の2つを例に挙げて、学んだ事を述べようと思う。1つ目は、震災直後、被災者を訪ね、海岸林再生のための計画を伝えるものの、当初はオイスカが自己利益のために行動を起こしていると、地元の方々から捉えられてしまい、計画実行が難航したというものだ。2つ目は、オイスカの活動資金が、活動を理解してくださっている理解者からの支援金である事から、活動費用をできる限り抑える必要があるというものである。この様な障壁に対し、オイスカの職員の方々は“活動の意義を明確にし、目標達成に必要な物を準備する”という信念の下、経験や

情熱を注ぐ事で乗り越えてきた。1つ目の震災直後の時には、「沿岸部の農業の復興のため、そして再び有事が起きた際に沿岸部を守るために海岸林が必要である。」という、自己利益ではなく地域の人々の事を第一に考えた上で先の活動の意義があるという事を明確にした。その意義、目的達成のためには現地の方と共に歩む必要があり、それこそが目標達成のための準備であった。2つ目に關しては、海岸林再生プロジェクトが儲けを求めるものではなく、理解者からの支援金を適切に使うという意義の下、削る事のできる不必要な費用は削る事を徹底していた。その例として、植樹のための苗木を購入するのではなく、それよりも安価な種子を購入し、オイスカと現地農家の方々の技術によって種子から育て上げるというスタイルを取った。これにより費用を抑えるだけでなく、種子から育てた苗木を販売する事で海岸林再生事業の資金に当てる事ができるようになってしまった。この様に“活動の意義を明確にし、目標達成に必要な物を準備する”という考えに基づいて行動を起こすことでの目標達成だけでなく、周囲からの活動理解もえることができるという事を学ぶ事ができた。

2. 向き合うべきこと

8ヶ月間のインターン活動を通じて多くの事を学んだが、その中で感じた自身の課題として講演会、プレゼンテーションの技術が挙げられる。プレゼンテーションというのは、自分の活動や研究の意義、必要性を伝える手段であり、その善し悪しによって協力や支援を得られるか否かが決まる重要な場面である。インターン期間中、海岸林再生プロジェクトの担当部長の方の仙台日経懇話会での90分にわたる発表を聴講させて頂く機会があった。その講演ではこれまでのオイスカから現在、そして未来を見据えた計画の話が展開されていた。講演の流れがしっかりとと考えられており、内容が飲み込みやすい構成となっていた。また、スライドに関しても要点を押さえた簡潔な表現、わかりやすいチャート図や写真があり、聞き手が困る事がないように入念に準備がなされていた。そして最も感銘を受けたのは、プレゼンターの熱量であった。オイスカの活動は募金や協力金を資金源としているため、活動への理解者を増やす必要がある。講演を聴いてくださる人たちの心を動かすには、データに基づく実績や見立ても必要ではあるが、活動に対する本気度、熱量が決め手になる。この仙台日経懇話会を通じて、自分自身の発表に対する向き合い方を見つめ直す事ができた。私は来年より大学院に進学し、今よりも更に研究の意義を伝え、そして得られた結果の有意性を説く必要が出てくる。その時には、オイスカ海岸林再生プロジェクトの担当部長の方が見せてくださった様な、熱量の伝わる、熱い発表を行える様、自分自身と向き合っていきたい。

CSO ラーニング制度では、オイスカのインターンだけでなく、様々な環境問題に取り組む横の繋がりを作る事ができた。そこでは、自分の知らない様々な環境問題が存在する事を認知する事ができた。これをきっかけとして、今後も環境問題に自分事として向き合う姿勢を持ち、積極的に関わっていきたいと感じた。